1階　映ぞう展示

- 「神栖の歴史」
- 昔話「おとりの手かけ松」
- 「神栖市の文化財」
- 「神栖市の年中行事」

2階　民ぞく展示室

昭和30年代頃までによく使われていた道具を農業・漁業・生活に分けて展示しています。

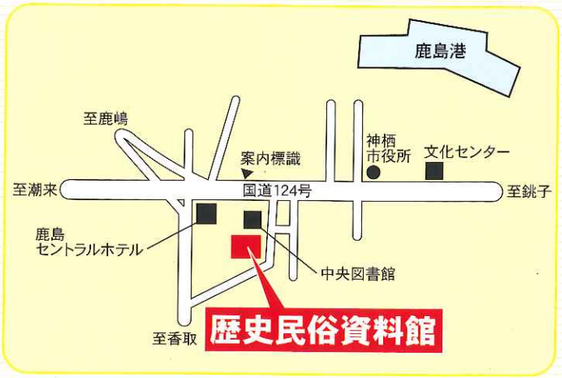
利用のご案内

◆開館時間　午前９時～午後４時30分

◆休館日　毎週月曜日
年末年始（12／29～１／３）

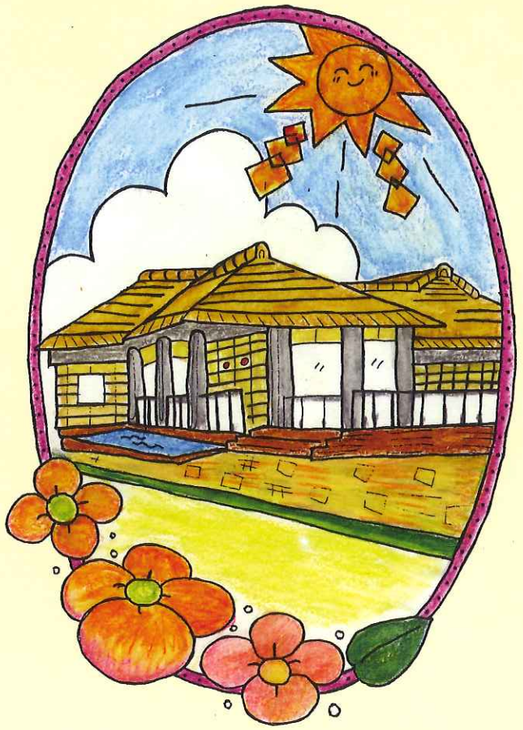
◆入館料　無料

ご案内図



2013. 3

神栖市 歴史民俗資料館



〒314-0144
茨城県神栖市大野原4丁目8-5
TEL 0299-90-1234
FAX 0299-93-4055
E-mail:rekishi@city.kamisu.ibaraki.jp

市のうつりかわり（年表）

時代	年代	主なできごと
縄文		・奥野谷貝づかがつくられる。
古ふん	300	・このころ賀、高浜などに集落がつくられる。
	500	・このころ日川、高浜などに古ふんがつくられる。
奈良	715	・このころ『常陸国風土記』が書かれる。
平安	807	・息栖神社が日川から息栖へ移る。
	1162	・このころ霞ヶ浦、利根川などに海夫があらわれる。
	1180	・筒井浄妙が宇治橋の戦いで活やくする。
室町	1374	・香取神宮が海夫注文をつくる。市には13の津（港）があったことがわかる。
江戸	1631	・幕府によって検地が行われ、19の村ができる。
	1800	・このころ東国三社もうでが流行し、下利根地方に多くの人々が訪れる。
明治	1869	・居切堀の工事がはじまる。
	1871	・19の村は宮谷県から新治県となる。
	1875	・その後、茨城県になる。
	1877	・じょう気船「通運丸」が銚子－東京間を結ぶ。
	1889	・市制町村制により、軽野村、中島村、東下村、矢田部村、若松村になる。
大正	1922	・鹿島文化村がつくられる。
	1924	・鹿島理想郷がつくられる。
	1925	・中島村が息栖村となる。
昭和	1928	・東下村が波崎町となる。
		・鹿南文化自動車の乗合バスが、鹿島－波崎間を走る。
		・萩原に軽野弘道会館がつくられる。
	1933	・鰐川干たくが完成する。
		・成田線が銚子まで開通する。
	1941	・太平洋戦争が起こり、神之池海軍飛行場の建設がはじまる。
	1942	・大野原に中央航空研究所がつくられる。
	1946	・大野原開たくがはじまる。
	1955	・軽野村と息栖村が合ぺいし、神栖村となる。
	1960	・鹿島開発がはじまる。
	1965	・神之池のうめ立てを決める。
		・鹿島港の中央航路のほりこみがはじまる。
	1969	・鹿島港が開港する。
	1970	・神栖町となる。
		・鹿島線、鹿島臨海鉄道が開通する。
	1972	・鹿島セントラルビルが完成する。
	1973	・息栖、小見川大橋が完成し、と船がはい止される。
	1974	・水郷有料道路が開通する。
平成	2005	・神栖町と波崎町が合併し、神栖市となる。
	2009	・神栖市民憲章及び市の花・木・鳥制定 花：センリョウ・木：マキ・鳥：ウグイス

市の文化財

市には、国や県・市から重要な文化財として選ばれたものがあります。

国　山本家住宅（奥野谷地区）

山本家は、漁船やあみをもっていた漁家で名主をつとめたこともあります。家は、曲屋というL字形で、江戸時代の中ごろにたてられたと思われます。

県　波崎の大タブ（神善寺）

周囲約8.10m、幹高約15m、樹齢約1,000年余を数えます。別名をイヌグスといいます。

県　ウチワサボテン群生地（太田地区）

熱帯アメリカ原産。100年は経過しているのではないかと推定されます。毎年6月～8月頃には黄色く美しい花を咲かせます。

市　浄妙づか（筒井地区）

有名な『平家物語』にも登場する筒井浄妙というおぼうさんが、生きながら土の中に入って、亡くなった場所と伝えられています。

市　獅子舞（田畑地区）

毎年7月の最終土・日曜日に行われます。地区の安全をいのり、三匹の獅子たちが神社や寺、各家を一けんずつまわります。

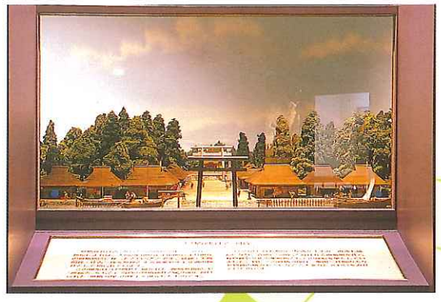
市　孫わたし（下幡木地区）

およめさんが実家で産んだ子どもを、よめ入り先に引きわたす行事です。お宮参りをした後、しまだい引きなどの祝いごとを行います。

神栖市の歴史を知ろう！

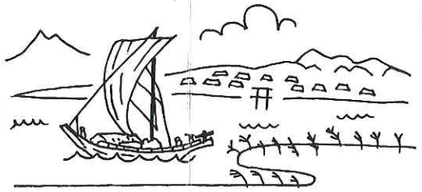
1階　常設展示室

資料館を見学しよう！



●東国三社と息栖神社

息栖神社は、大同2年(807)に日川から息栖に移ったと伝えられています。江戸時代には、鹿島・香取・息栖をめぐる旅が流行し、多くの人々が訪れました。



●明治い新

明治時代になると藩にかわって県がおかれ、宮谷県、新治県をへて茨城県となります。明治22年(1889)の市制町村制による合併では軽野村、東下村、中島村、矢田部村、若松村の5つとなります。

●開たくの歩み

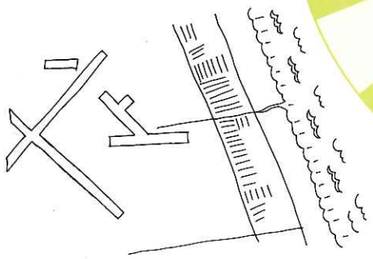
人々は、水害を防ぐために居切堀や利根川の流れをよくする工事を行いました。また、鰐川の三角州を干たくし、水田にしました。

●交通の発達

古くから水上交通が発達し、じょう気船やと船が活やくしていました。また、陸上でも鹿島－波崎間を乗合バスが走り、便利になりました。

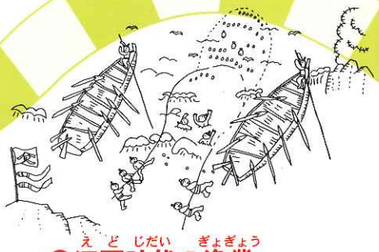
●文化と教育の向上をめざして

明治時代以後、各地区につくられた塾などが青少年の教育にえいきょうをあたえました。奥野谷に生まれた峰間信吉は日本の教育問題に取り組みさまざまな活動をしました。



●江戸時代のしゅう運と文化

利根川は江戸への荷物を運ぶ水路として発達しました。川ぞいには河岸ができ、人や物が行きかいにぎわっていました。

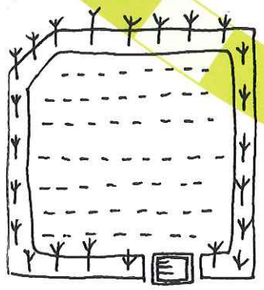


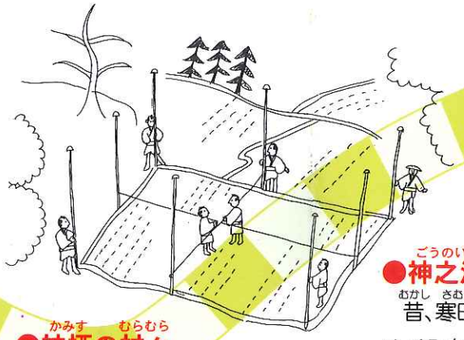
●江戸時代の漁業

海や川などでは漁業がさかんでした。とくに、鹿島なだでは地引きあみでイワシをとり、肥料にして出荷していました。

●江戸時代の農業

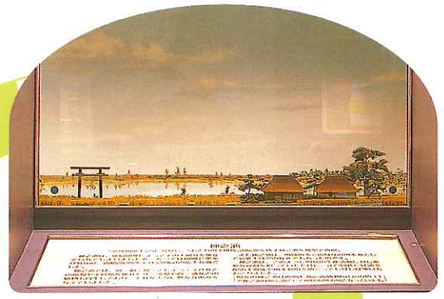
人々は米をたくさんとるために新しい田を開き、砂きゅうにはほり下げ水田がつくられました。





●神栖の村々

江戸時代に行われた地検により市域は19の村に分けられ幕府や旗本の支配する土地となりました。



●神之池

昔、寒田とよばれた池は、千年以上も前から人々に豊かなめぐみをあたえていました。その池も鹿島開発によってうめ立てられ、7分の1の大きさになりました。

●筒井浄妙

筒井地区の出身と伝えられているおぼうさんで、有名な『平家物語』にも登場しています。

●板碑

墓石のようなもので、亡くなった人の供養のためにたてられました。現在、市では五つみつかっています。

●海夫

昔、利根川は海水が霞ヶ浦まで入りこむ大きな入り江でした。岸には津という港がつくられ、海夫とよばれる人たちが漁業や交易をしながら生活していました。

●常陸国風土記

今から約1,300年前につくられました。神之池のことや鹿島の砂鉄で鉄をつくったことなどが書かれています。

市の移りかわりをくらべてみよう！

●市を拓く

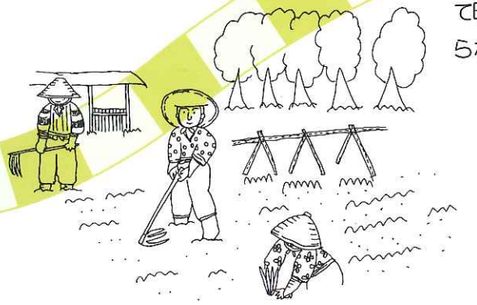
現在の神栖市の模型です。人々は水の豊かなめぐみを受けながら、水害や水辺の開たくなど水と共存し更なる快適なくらしをめざして発展を続けます。

●水の郷

明治18年頃の神栖市の模型です。海・川と中央には神之池と水に囲まれた市は、昔から水と深く関わりながら発展してきました。

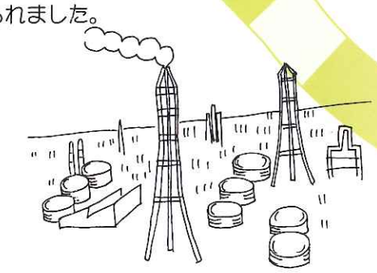
●戦後の復興

戦争が終わり、戦地から帰ってきた人々は、軍用地だった大野原地区や若松地区などの荒地を開たくしました。



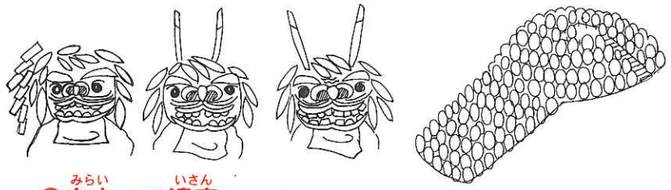
●鹿島開発への途

昭和30年(1955)に軽野・息栖村が神栖村になりました。このころにあった自衛隊き地計画は地元の反対にあい、かわって昭和35年(1960)から鹿島開発が進められました。



●戦時下の神栖

市には砂きゅうや広大な土地があったので飛行場などの軍のし設がつくられました。また、このころから物が不足し、人々のくらしは苦しくなりました。

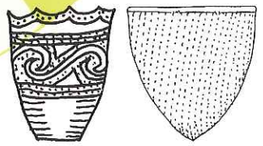


●権現づか古ふん

日川地区に残されている古ふんです。昔、権力のある人が古ふんとよばれる大きな墓をつくりました。

●未来への遺産

昔の人々が残した文化財を保護・活用し、未来へ引きついでいきましょう。

●神栖市の遺せき

市で一番古い奥野谷貝づかは、縄文時代の遺跡です。また、利根川ぞいでは古ふん時代の家のあとが多く発見されています。